

【原文】

古者賢人好生也、悉氣屬斗前、與天行并。故日吉、能有氣也。諸爲奸猾・陰賊・惡邪、悉象陰、氣屬斗後。故日衰、所爲者凶。

【訓】

古者の賢人生を好むや、悉く氣を斗前に屬せしめ、天行と并わす。故に日吉にして能く氣有るなり。諸もろの奸猾・陰賊・惡邪を爲すもの、悉く陰を象り、氣を斗後に屬せしむ。故に日衰え、爲す所のものは凶たり。

【譯】 前回の段落につづく

古代の賢人たちは生（育の徳）を好み、ことごとく氣を北斗の前（建・除・滿・平・定・執）におき、天の運行とあわせた。だからそれらの日は吉であり（ものごとを生育する）氣があったのである。各種の奸詐と狡猾、陰害と邪惡をはたらくものは、すべて陰のたぐいとなし、その氣を北斗の後（破・危・成・収・開・閉）においた。だからそれらの日は（生氣が）衰え、おこなうことは凶となる。

【注】

○好生 『尙書』大禹謨「好生之徳、洽于民心」。『太平經』卷五〇生物方訣「夫天道惡殺而好生」。『太平經鈔乙部』錄身正神法「陽者好生、陰者好殺。陽者爲道、陰者爲刑。陽者爲善、陽神助之。陰者爲惡、陰神助之」。※『太平經鈔乙部』「帝王思仁善者、瑞應獨爲其出、圖書獨爲其生。帝王仁明生于木火、武智生于金水、柔和生土。天之垂象、無誤者也」。

○斗前・斗後 『太平經鈔戊部』「故帝王氣起少陽・太陽、常守斗建」、「死亡氣乃起於少陰・太陰、常守斗魁」。『太平經』卷一一六「是常先動其帝氣、其次動王氣、其次動相氣、其次動候氣、其次動微氣。此氣皆在天斗前日進、欲見助興、故動之。其餘氣者、皆在天斗後、天氣所背、去氣日衰、故不宜興動、與天反地逆、不合天地之心、故凶。」『太平經鈔辛部』「生氣者屬天屬陽屬前。天道以神氣生、故斗前六神皆生、後六神屬地屬陰。天道以死氣爲鬼、爲物凶咎」。

○天行 『周易』乾「天行健、君子以自強不息」。『太平經鈔乙部』以樂卻災法「作道治正、當如天行」。『太平經』卷四九急學眞法「故天行者、與四時并力。天行氣、四時亦行氣、相與同心」。卷九六「天者純爲道、地者純爲徳。……象於天行、當有眞道而好生。象地、當有善徳而好養長」。

○日吉 『春秋左氏傳』昭公傳七年「天有十日」注「甲至癸」。『吳越春秋』勾踐七年（前四九〇）「范蠡曰、今日丙午日也。丙、陽將也。是日吉矣」。『太平經鈔乙部』錄身正神法「積善不止、道福起、令人日吉」。

○有氣 『太平經鈔戊部』「故帝王氣起少陽・太陽・常守斗建」。『太平經鈔癸部』「神精有氣、如魚有水。氣絕神精散、水絕魚亡」。『太平經』卷四二四行本末訣「故人有氣則有神、有神則有氣、神去則氣絕、氣亡則神去」。

○奸猾・陰賊・惡邪 『太平經』卷九二火氣正神道訣「陰者稱邪、故奸氣常以陰中往來」。卷九〇「爲行常善、不爲陰賊」。卷三五「盜賊多以財物爲害」。

○陰・氣 『太平經』卷三六事死不得過生法「生、陽也。卒、陰也。事陰不得過陽。陽、君道也。陰、臣道也。事臣不得過於君。事陰過陽、即致陰陽氣逆而生災。……陰氣勝陽、下欺上、鬼神邪物大興、而晝行人道、疾疫不絕、而陽氣不通」。

【原文】

元氣恍惚自然、〈共凝成一、名爲天也〉。「共凝成天、名爲一也」。分而生陰而成地、名爲二也。因爲上天下地、陰陽相合、施生人、名爲三也。三統共生、長養凡物、名爲財。財共生欲、欲共生邪、邪共生奸、奸共生猾、猾共生害、而不止則亂敗。敗而不止、不可復理。因窮還反其本。故名爲承負。

【訓】

元氣は恍惚として自から然り、「共に凝して天を成し、名づけて一と爲すなり」。分ちて陰を生じて地を成し、名づけて二と爲すなり。上天・下地と爲り、陰陽相合するに因り、施こして人を生じ、名づけて三と爲すなり。三統共に生じ、凡物を長養し、名づけて財と爲す。財は共に欲を生じ、欲は共に邪を生じ、邪は共に奸を生じ、奸は共に猾を生じ、猾は共に害を生じ、而して止ざれば則ち亂れ敗る。敗れて止ざれば、復た理む可からず。窮まりに因りて還た其の本に反る。故に名づけて承負と爲す。

【譯】元氣↓天(陽) ↓地(陰) ↓人(陰陽相合) ↓物/財↓欲↓邪↓奸↓猾↓害↓敗

元氣は形なく把握できないが、自己運動の法則をもち、(元氣を)凝らして天を成す。それを名づけて一という。(一から)分かれて陰を生じ、大地を成す。それを名づけて二という。上天・下地となり、陰氣と陽氣とが相互に作用することによって、(中和の氣を)施こして人を生ず。名づけて三という。(天地人の)三統がともに生じ、すべての物を養い育てる。それを名づけて財という。財は共に(人間の)欲望を生じ、欲望は共に邪なところを生じ、邪心は共に奸(いつわり)を生じ、奸わりは共に猾(わるがしこさ)を生じ、猾は共に害を生じ、(この連鎖が)止まらなければ亂れてだめになる。だめになっても止まらなければ、ふたたび秩序を回復できない。(その弊害は)窮地よりまたその根本にかえる。それを名づけて承負という。

【注】

○元氣 『漢書』律曆志上「太極元氣、函三爲一」。顏師古注「孟康曰、元氣始起於子、未分之時、天地人混合爲一」。『楚辭』王逸「九思・守志」。「隨真人兮翱翔、食元氣兮長存」。※『淮南子』

天文訓(太平御覽五)「道始生虛霏、虛霏生宇宙、宇宙生元氣、(氣)有涯垠、清陽者薄剽而爲天、重濁者凝滯而爲地」。張衡「靈憲」(『後漢書』天文上)「於是元氣剖判、剛柔始分、清濁異位。天成於外、

地定於內。天體於陽、故圓以動。地體於陰、故平以靜」。『太平經』卷六七「夫物始於元氣」。

○恍惚 『老子』第二章「道之爲物、惟恍惟惚。惚兮恍兮、其中有象。恍兮惚兮、其中有物」。

『河圖』(太平御覽五)「元氣無形、洵洵蒙蒙、偃者爲地、伏(覆)者爲天也」。

○自然 『老子』第二章「道法自然」。『太平經鈔乙部』名為神訣書「元氣自然，共為天地之性也」。

○一二三 『老子』第四章「道生一、一生二、二生三、三生萬物。萬物負陰而抱陽，沖氣以為和」。『太平經』卷四〇分解本末法「天初一也，下與地相得為二，陰陽具而共生。萬物始萌於北，元氣起於子，轉而東北，布根於角，轉在東方，生出達，轉在東南，而悉生枝葉，轉在南方而茂盛，轉在西南而向盛，轉在西方而成熟，轉在西北而終，物終當更反始」。

○上天下地 『太平經』

○反其本 『老子』第一六章「夫物芸芸，各復歸其根」。第四〇章「反者道之動」。第二五章「字之曰道，強為之名曰大，大曰逝，逝曰遠，遠曰反」。

○三統 『太平經乙部』名為神訣書「故純行陽，則地不肯盡成。純行陰，則天不肯盡生。當合三統，陰陽相得，乃和在中也」。『太平經』卷九二「夫天地人三統，相須而立，相形而成」。『太平經』卷四八三合相通訣「天氣悅下，地氣悅上，二氣相通，而為中和之氣，相受共養萬物，無復有害，故曰太平。天地中和同心，共生萬物」。

○長養 『荀子』非十二子「一天下，財萬物，長養人民，兼利天下，……則是聖人之得勢者，舜禹是也」。『老子河上公注』第二章「三生萬物」注「天地共生萬物也。天施地化，人長養之也」。『太平經鈔乙部』解承負訣「中和長養萬物也」。

○財共生欲 『春秋左氏傳』桓公傳十五年「天子不私求財」。僖公傳二十四年「竊人之財，猶謂之盜」。『莊子·外篇』秋水「是故大人之行，不出乎害人，不多仁恩，動不為利，不賤門隸，貨財弗爭」。『莊子·雜篇』則陽「榮辱立，然後睹所病，貨財聚，然後睹所爭」。

○亂敗 『尚書』微子「我用沈酗於酒，用亂敗厥德於下」。孔傳「敗亂湯德於後世」。『春秋左氏傳』隱公傳五年「其材不足以備器用，則君不舉焉。君將納民於軌物者也。故講事以度軌量謂之軌，取材以章物采謂之物，不軌不物，謂之亂政。亂政亟行，所以敗也」。杜預注「材謂皮革·齒牙·骨角·毛羽也。器用、軍國之器。言器用衆物，不入法度，則為不軌不物，亂敗之所起」。

○因窮 『三國志·蜀志』陳壽評「能因窮致泰」。

○承負 『太平經鈔乙部』解承負訣「天地開闢已來，凶氣不絕，絕者而後復起，何也？……天地六合八遠萬物，都得無所冤結，悉大喜，乃得增壽也。一事不悅，輒有傷死亡者。……力行善反得惡者，是承負先人之過，流災前後積來害此人也。其行惡反得善者，是先人深有積畜大功，來流及此人也」。

【原文】

夫天道無心，遭不肖則亂，得賢明則理。古者帝王，得賢明乃道興，不敢以下愚不肖為近輔。速以吾此文，付上德之君行之。洞明者光以三氣，相見問之。占十中十，所理悉理，此第一善明，可以為帝王使。占十中九，一氣亂不理，可為諸侯使。占十中八，二氣亂不理，可為凡人使。過此已下，名亂天道。必有冤結鬼神精，伏逃不見不可理，不能調和太平之氣。

子欲得道思書文，求道之法靜為根。積精不止神之門，五德和合見魂魄。心神已明大道陳，先知安危察四鄰，群神大來集若雲。若是不息長壽君，○哉大道不用勤。形若死灰守魂神，魂神不去乃長存，周者反始環無端。去本求末道有患，衆民失之不得完。思其意無失真言，清靜為本非用錢。可不重愛

明師言？順受師語不死焉。愚者逆師與鬼鄰、不得正道入凶門、遂不復還去○神、骨肉腐塗稱祖先、命已滅亡大窮焉。

【訓】

夫れ天道は心無し。不肖に遭えば則ち亂れ、賢明を得れば則ち理まる。古者の帝王、賢明を得て乃ち道興り、敢えて下愚・不肖を以て近輔と爲さず。速かに吾が此の文を以て上徳の君に付し、之を行わせよ。洞明なる者は光くこと三氣を以てし、相見して之を問う。十を占えば十中り、理むる所悉く理まるもの、此れ第一の善明たり、以て帝王の使と爲す可し。十を占い九中るは、一氣亂れて理らず、諸侯の使と爲す可し。十を占い八中るは、二氣亂れて理まらず、凡人の使と爲す可し。此を過ぎて已下は、天の正道を亂だすと名づく。必ず鬼神の精に冤結有り、伏し逃れて見えざれば理む可からず、太平の氣を調和する能わず。

子道を得んと欲せば書文を思えよ。求道の法は靜を根と爲す。精を積み止まらざれば神の門、五徳和合すれば魂魄を見る。心神已に明らかなれば大道に陳び、先に安危を知りて四鄰を察し、群神大に來り集まること雲の若し。是の若くして息まざれば長壽の君たり。○なるかな、大道は。用いるも勤れず、形は死灰の若くし魂神を守る。魂神去らずんば乃ち長く存し、周くして始に反り環の端無きがごとし。本を去りて末を求むるは道に患い有り、衆民之を失い完うするを得ず。其の意を思い眞言を失う無く、清靜を本と爲し錢を用いるに非ず。明師の言を重んじ愛せざるべけんや、師語を順受すれば死せず。愚者は師を逆らい鬼と鄰となり、正道を得ざりて凶門に入り、遂に復た還らず。神を去り骨肉腐り塗れば、祖先と稱すれども、命已に滅亡して大に窮る。

【譯】

天道は（固定した）心はない。不肖なものにあえば亂れてしまい、賢明なものにあえば治まる。古代の帝王は、賢明な人材を得てはじめて（正しい）道が興りえたのであり、下愚と不肖は側近や輔佐として使わなかった。速かに吾がこの書を手に入れて上徳の君主に献上し、行わせよ。あますことなく明らかかなものは、陰・陽・中和の三氣に照らしあい、ものごとを（占い）問うた。十を占えば十があたり、治めることはすべて治まる。これが第一の「最善の明賢」であり、帝王の使いものとすべきである。十を占い九があたりるのは、一氣が亂れて治まらないものであり、諸侯の使いとすべきである。十を占い八があたりるのは、二氣が亂れて治まらないものであり、凡人の使いとすべきである。その以下は、天の正道を亂だすものと名づける。必ず鬼神の精に冤恨を結ぶことになり、（天書は）ひそみかくれ見えなくなるので、治めることもできず、太平の氣を調和することもできない。

そなたは得道したいなら、この書を思念せよ。求道の法は靜を根本とする。精氣を積み重ねて止まらなければ、神の境地（に到達し）、五徳が和合すれば魂魄を見ることができ。心神がすでに明らかになれば大道は開陳され、先に安危を知り、四方（のできごと）を察知し、神々が雲のように集まってくる。このようにして息むことなければ、長壽の君主である。○ではないか、大道は。用いられてもつきることはない。ただ身體を死灰のように靜まりかえし、魂神を守る。魂神が去っていかなければ長しえに存在し、（宇宙の時間は）一周して始まりに反る、環に始まりと終わりがが

ないように。根本を離れて末端を求めるのは、成道に患いあること。多くの民は道を失って完全にすることができない。その意味をよく考え眞理の言葉を失うことなく、清静を根本として金銭を用いない。明師の言葉を重んじ大切にしないことができるだろうか、師の言葉を受け順えば不死となるのだから。愚かなものは師を逆らい鬼魅の鄰となり、正道を得ることができず、凶門に入ってしまう、結局散り去った魂神を戻すことはできない。骨肉が腐りまみれば祖先といえども、その命はすでに消え去り大に窮ってしまうのである。

【注】

○天道無心 『太平經鈔甲部』 「天道無親、唯善是與」。『老子』第五章 「天地不仁」。第四九章 「聖人無常心、以百姓心爲心」。

○下愚・不肖 『論語』陽貨 「唯上智與下愚不移」。『太平經鈔乙部』名爲神訣書 「一身之中、能爲賢、能爲神、能爲不肖」。

○賢明 王褒 「聖主得賢臣頌」 （『文選』四七） 「故世必有聖智之君、而後有賢明之臣」。『太平經』卷五四 「夫子賢明者爲父計、臣賢明者爲君深計」。

○洞明 『太平經』卷四二 「是故古聖賢、深觀天地歲月日人民萬物、視所興衰浮平進退、以自知行得與不得、與用洞明之鏡自照、形容可異」。『太平經』卷四八 「令吏民更易心爲善、得天意、所上當多善、若令大易當大善。……故是天洞明照心之鏡也」。

○三氣 『太平經鈔乙部』名爲神訣書 「太陰・太陽・中和三氣共爲理、更相感動、人爲樞機、故當深知之」 和三氣興帝王法 「元氣有三名、太陽・太陰・中和。形體有三名、天・地・人」。

○相見 『太平經』卷一一 「大聖上章訣」 「心神在人腹中、與天遙相見、音聲相聞、安得不知人民善惡乎」。

○冤結 『太平經鈔乙部』解承負訣 「天地六合八遠萬物、都得無所冤結、悉大喜、乃得增壽也」。『太平經』卷三五 「或有一家乃殺十數女者、或有妊之未生出、反就傷之者、其氣冤結上動天」。

「故與子深語、道天地之意、解帝王之所愁苦・百姓之冤結・萬物之失理耳」。

○鬼神精 『太平經』卷三六事死不得過生法 「生人、乃陽也。鬼神、迺陰也。生人屬晝、死人屬夜……若晝大興長則致夜短、夜興長則致晝短、陽興則勝其陰、陰伏不敢妄見、則鬼神藏矣。陰興則勝其陽、陽伏、故鬼神得晝見也」。「陰氣勝陽、下欺上、鬼神邪物大興、而晝行人道、疾疫不絕」。「日盛即生人盛、夜盛即鬼神盛。夫人以日俱、鬼以星俱。日、陽也。星、陰也。故日見即

星逃、星見即日入。故陰勝即鬼神爲害」。※『太平經』卷九六 「今故下古之人、承負先人失計、稍稍共絕道徳、日獨積久、與天地斷絶、精氣不通、不相知命、反與四足同命、故天地憎惡之、鬼神精氣、因而不祐之、病之無數、殺之無期」。

○伏逃 『列子』黃帝 「逮於末世、隱伏逃竄、以避患害」。『太平經』卷一〇八災病證書欲藏訣 「請問天師書、以何知其欲見行、以何知其欲見逃也？……以災病爲證也。出而病人、即天欲藏也。逃而病人、即天欲出行也」。「凡物樂出、而反逃藏之、大凶矣。凡物欲逃藏、而反出之、亦大凶也」。『太平經』卷一一六 「陽興則陰精伏、猶如春夏起、秋冬伏、自然之式也」。

○太平之氣 『太平經鈔丙部』 「太平炁……太者、大也。言其積大如天、無有大於天者。平者、言治太平均、凡事悉治、無復不平。……天氣悅下、地氣悅上、二氣相通、而爲中和之氣、相受共養

- 萬物、無復有害、故曰太平」。卷四八三合相通訣「太者、大也。平者、正也。氣者、主養以通和也」。『太平經鈔乙部』名爲神訣書「古者聖人治致太平、皆求天地中和之心」。和三氣興帝王法「三氣合并爲太和也。太和、即出太平之氣。斷絕此三氣、一氣絕不達、太和不至、太平不出」。
- 靜爲根 『老子』第一章「夫物芸芸、各復歸其根。歸根曰靜、是謂復命。復命曰常、知常曰明」。『太平經鈔乙部』「天下之事、各從其類。故帝王思靖、其治亦靜、以類召也」。三急吉凶法「居清靜處、已得其意、其治立平、與天地相似哉」。
- 積精不止 『韓非子』解老「身以積精爲德、家以資財爲德、鄉國天下皆以民爲德」。『太平經乙部』「古之學者以安身、今之學者浮華文。不積精於身、反積精於文、是爲不知其根矣」。
- 神之門 『太平經鈔癸部』賢不肖自知法「夫人愚學而成賢、賢學不止成聖、聖學不止成道、道學不止成仙、仙學不止成眞、眞學不止成神、皆積學不止所致也」
- 五德和合見魂魄 『太平經』卷七二齋戒思神救死訣「此四時五行精神、入爲人五臟神、出爲四時五行神精。其近人者、名爲五德之神、與人藏神相似」。『太平經』第三三（三洞珠囊卷一）「肝神去、出遊不時還、目無明也。心神去不在、其脣青白也。肺神去不在、其鼻不通也。腎神去不在、其耳聾也。脾神去不在、令人口不知甘也。頭神去不在、令人胸冥也。腹神去不在、令人腹中央甚不調、無所能化也。四肢神去、令人不能自移也。夫神精、其性常居空閑之處、不居污濁之處也」。
- 心神 『太平經』卷九二「夫道德與人、正天之心也。比若人有心矣。人心善守道、則常與吉。人心惡不守道、則常衰凶矣。心神去、則死亡矣」。『太平經鈔辛部』「夫陽精爲神、屬天、屬赤、主心。心神、乃天之神也。精者、地之精也。鬼者、人之鬼也。……太平氣至、陽氣大興、天道嚴神道明。明則天且使人俱興用之。神道用、則以降消鬼物之道也」。
- 大道陳 『太平經』（太平御覽六六八）「求道之法、靜爲基先。心神已明、與道爲一、開蒙洞白、類如晝日。不學其道、若處暗室而迷方也」。
- 先知安危察四鄰 『太平經』卷一一六「故天之所向者興之、天之所背者廢之、是爲知時氣、吉凶安危、可知矣」。「故吾事爲文也、隨天爲意、隨地爲理。順之者吉且昌、逆之者凶也。……故夫天乃有三氣、上氣稱樂、中氣稱和、下氣稱刑。故樂屬於陽、刑屬於陰、和屬於中央。故東南陽樂好生、西北陰怒好殺、和氣隨而往來」。
- 不用勤 『老子』第六章「用之不勤」。
- 形若死灰守魂神 『莊子·內篇』齊物論「形固可使如槁木、而心固可使如死灰乎」。『太平經聖君秘旨』「守一之法、不言其根、謹閉其門。不敢泄漏、謹守其神」。
- 周者反始 『史記·武帝本紀』「天子親至泰山、以十一月甲子朔旦冬至日祠上帝明堂、每脩封禪。其贊饗曰、天增授皇帝泰元神策、周而復始」。『韓詩外傳』卷五「故三王之道、周而復始、窮則反本」。
- 環無端 『莊子·雜篇』天下『經典釋文』引司馬彪注「天下無方、故所在爲中。循環無端、故所行爲始也」。『范子計然』（太平御覽卷三）「日者行天、日一度、終而復始、如環無端」。
- 骨肉腐塗 『太平經』卷三六「夫人死、魂神以歸天、骨肉以付地腐塗。……骨肉者無復存也、付歸於地」。
- 大窮 『莊子·外篇』繕性「當時命而大行乎天下、則反一無跡。不當時命而大窮乎天下、則深根寧極而待。此存身之道也」。